



みんな

みんなの力がわになつて 美しいまちが生れる

万人の美化運動

10月5日(日)午前9時「晴」
路面を埋めて自動車の列がつづく。クラクションがひびき、近くの建設現場のざわめきが伝わる。力強い生活の鼓動の中から江戸川区の一日がはじまる。空はくまなく晴れ渡っているが、陽の光は弱い。ほうきやバケツを手にした人たちが2人3人と公会堂まえに集まってくる。

きょうは江戸川区少年団連合会(会員一万六千名・育成会員四千名)が主体となって、町会の人たちと手を取り合い、まちの清掃をするのだ。参加する人は総数約四千人。区内各所でいっせいに、まちを愛する人たちの善意が花ひらく。清掃箇所は、ガードレール・歩道・道路標識・歩道橋など日頃通学や買物のとき利用する場所が中心になる。

公会堂前には、もう150人ほどの人が集合している。手ぬぐいを頭にかぶった主婦の姿が多い。日曜の朝、忙しい時間をやりくりして集まった人たちの生気があふれる。交通整理にあたる人、連絡をする人、ゴミ集めを受持つ人、各分担ごとに整然とした行動が開始される。町会長をはじめ、役員も総出動だ。泥をかぶったガードレールがたちまちまっ白に洗われ、水をうたれた歩道はみる間に掃き清められて行く。

朝の貴重なひとときがすぎた。はれやかな太陽が雲間から顔を出した。この一万人の美化運動は、第一日曜の朝を定例日として、これから毎月、つづけられる。

「紙くずが落ちていたら、ひろってくずかごへ」という小さな行動から、私たちのまちをきれいにする運動がスタートします。誰もが、自分の家では、ゴミをくずかごに入れます。煙草を吸ったときは吸いがらを灰皿に始末します。同じ事を外へ出してからひとりひとりが心がければよいのです。最小限の美化運動は、ゴミを出さない、まちをよごさないということからはじまります。

環境浄化対策 協議会が初会合

明るくすまひ江戸川区をきづいて行くために、区では、私たちの生活環境を悪化させるさまざまな要因を分析し、区内にあるすべての知恵と力を結集して、山積する課題の解決に当らうと、区長を会長に、区議会・各種民間団体・企業関係者・区内官公署・公私立学校などの代表者からなる環境浄化対策協議会をスタートさせました。その第一回の会合は、9月9日午前10時から区民センター会議室でひらかれましたが、2名を除いた全メンバーが出席し、さまざまな問題点をもちり、熱心に討議を重ねました。そこで、当面の目標として

- ①区内のゴミ処理対策
 - ②住民意識の向上
- の二点がきめられました。
- 10月16日(木)には環境浄化対策本部がひらかれ、ゴミのないまちにするためのより具体的な対策がねられました。都市がその活動を停止しない限り、毎日ぞくぞくと排出さ

れてくる膨大なゴミの山。経済の高度成長にもとない、重化学工業を中心とする第2次産業が飛躍的に発達し、これらの産業から排出される廃棄物がこれまでのゴミの観念をすっかり変えてしまいました。家庭から出る台所のゴミ(雑芥や煙草の吸いがら、紙くず)などは、もはや生活廃棄物の一面を指し示すにすぎず、産業廃棄物(合成樹脂・金属などの屑・廃油・廃液・建設残材)や、粗大ゴミ(使えなくなったテレビ・洗濯機・自動車)、都市廃物(側溝・道路・河川・下水道などから出る汚泥)などのすべてを包含したものである。このゴミを考へなければならぬ

押しよせる都市化の波に、江戸川区でも1次産業(農業・漁業)が衰退し、2次産業(主として重化学工業)・3次産業(商業・サービス業)の興隆が目ざましく、一方で新しいゴミの山を生みだすとともに他面ではこれらゴミ・し尿の農村還元を不可能にしています。

対策本部では、ゴミのない江戸川区をつくりあげていくために、さしあたって区の段階でできることに問題をしばって行きました。

全般的な対策として、ゴミ追放宣言・宣言柱の樹立・くらしの環境写真募集と展覧会・清掃標語の募集・かへ新聞などの活動により江戸川区全体にわたって地域清掃への関心度を高めることがとらげられ、地域環境浄化会議・環境浄化協力員制度・清掃機隊などの組織を新設し、手近かなところからまちの美化にとりかかっているという基本態度をきめ、次回の環境浄化対策協議会に提案することとなりました。個別対策として特に家庭廃物については、ゴミ利用運動を展開し、有用なゴミを売却して資金を団体に還元することによって、運動をもりあげていく方法が検討されました。

江戸川区のお知らせ